

「形態」、「執筆者」は、該当する文章形態と執筆者が、それぞれどの時代にどれくらい現れたかを分析するために設定した。「執筆者」のうち「読者」は「氏名と住所が記されているもの」と規定したが、ヒヤリングにより「投稿」であることや、婦人之友社が『友の会』会員に執筆依頼した記事である場合が多いことがわかっている²⁾。つまり「読者」は、「友の会」か「投稿・懸賞」のいずれかである可能性があるということである。

「テーマ」は、非合理的な家庭生活・社会、階級制度、貧困、環境問題等の問題に対して、各時代において、何に反応し記事にしているかを把握するために設定した。項目に該当しない記事は、すべて「なし」に分類する。

目次にある記事タイトルだけでは内容等を判断しかねるし、たとえば、投稿記事が「投稿、他名」などと省略されていることが多い。そのため、分類にあたっては可能な限り記事本体を確認のうえ行なった³⁾。

記事は必ずしもこれら項目ひとつだけに該当するとは限らないので、複数分類可とした。

5-2-3 総体的分析

テーマごとのカテゴリーの出現頻度を見る前に、分析対象号の分析対象記事数と、総ページ数の変遷について分析を行う。これらの増減を捉えることが、後で行うテーマごとの分析の際の考察材料となると考えたからである（図 5-1）。

(1) 分析対象記事数の変遷

分析対象記事は、各号あたり平均約 31 である。

各号の記事数の変遷を時代ごとにみってみる。

まず「友の会以前」は、極端な増減を繰り返しながらも次第に増えている。しかしこの時期は『家庭之友』および『婦人之友』の目次のみしか資料がなく、目次において省略されていることも想定されるため、正確な数値ではない可能性がある。

「萌芽期」も極端な増減を繰り返すが、1937 年をピークに、太平洋戦争が近づくとつれて減少しはじめる。

そして「戦中」の終戦の 1945（昭和 20）年に、最も減少する。

「隆盛前期」は多少の増減はあるものの、全時代をとおして最も順調に増加した時代である。「隆盛後期」も増加していくが、「隆盛前期」ほど顕著ではない。そして 1971 年をピークに減少し始める。

「転換前期」は、1976 年前後 5 年に減少、その後増加し始めるが 1982 年には再び減少する。「転換後期」は少し持ち直し、増減を繰り返しながら増加するが、1999 年をピークに減少しつつある。

(2) 総ページ数の変遷

次に、総ページ数の変遷を時代ごとにみってみる。

ただし、主に創刊から戦前発行号の一部は、正確なページ数が掌握できていない。なぜなら 1908（明治 41）年までの号は目次のコピーがなく不明であり、1909（明治 42）年と 1910（明治 43）年の分析該当号には入手できた目次コピーにページ数字の掲載がないためである。1911（明治 44 年）から 1944（昭和 19）年までの発行号に関しては、入手できた目次コピーを見ても、最終掲載記事の最初のページ数字しか載っておらず、その記事が何ページに渡って掲載されているかはわからない。最終掲載記事の最初のページ数字を分析対象としたため、2～3 ページの誤差がある可能性がある。以下はそのうえで分析を行った結果である。

まず「友の会以前」は、極端にページ数が減ることもあるが、順調に増加し、この時代の最後の年 1926（大正 15）年には、300 ページ近くにまで増える。これは、確認できている 1911（明治 44）年発行号のおよそ倍のページ数である。

しかし「萌芽期」に入った 1927（昭和 2）年、前年の 6 割程度にまで減少する。これは、この年始まった金融恐慌に因る。ページ数と共に定価も 70 銭から 50 銭に下げること、生活の苦しい読者を考慮したのである⁴⁾。その後再び増加するが、1936（昭和 11）年をピークに減少し始める。この 1936 年発行号は、全年を通してもっともページ数が多い。

「戦中」も減少しつづけ、終戦の 1945（昭和 20）年には、わずか 32 ページとなってしまう。

「隆盛前期」は再び増加している。記事数同様、全時代を通してもっとも順調に増加した時期である。「隆盛後期」も多少の増減はあるものの、順調に増加し続ける。

戦後ページ数がもっとも増えたのは 1973（昭和 48）年で、264 ページに及んだ。翌 1974（昭和 49）年には 30 ページほど減少して 232 ページに、その後ほとんど増減のないのが「転換前期」である。「転換後期」は、1985（昭和 60）年をピークに少しづつ減少、2005 年発行号は、192 ページになっている。

(3)まとめ

分析対象記事数と総ページ数の増減変遷の分析から得られた知見は、以下のとおりである。

- ・ 分析対象記事数と総ページ数の各増減は、多少の誤差はあるもののほぼ同じように推移している。
- ・ 「友の会以前」は、分析対象記事数・総ページ数共増減が激しいものの、いずれもめざましく増加した。
- ・ 「萌芽期」は、全時代の中で分析対象記事数・総ページ数が最も多かった時代である。
- ・ 「戦中」は、年を追うごとに分析対象記事数・総ページ数共減少した。
- ・ 「隆盛前期」は、全時代の中で分析対象記事数・総ページ数共最も著しく増加した。
- ・ 「隆盛後期」は、とくに戦後において最も分析対象記事数・総ページ数が多かった時代である。

- ・ 「転換前期」は、前の時代と比較して分析対象記事数・総ページ数ともわずかに減少したが、増減の幅が比較的少なく安定していた時代である。
- ・ 「転換後期」は、分析対象記事数の増減が激しいものの、総ページ数は安定しながら少しずつ減少した。
- ・ 分析対象記事数は、ひとつの記事がとても長いときと短いときがあるので、総ページ数のような滑らかに増減しない。また、分析対象外記事のページも総ページ数に含まれている。これらを考慮したうえでも、戦前と比較すると戦後の方が安定している。つまり、近年になるに従って記事の構成方法が定着してきたと考えられる。
- ・ グラフ化してわかるのは、「友の会以前」、「萌芽期」の前半、「戦中」、「隆盛前期」「転換期」の中期には、総ページ数と比較して記事数の割合が多いことである。このことから、これらの時代は、各記事が小さい、執筆者が多いということが想定できる。
- ・ 分析対象記事数と総ページ数の変遷と、『友の会』の活動との関係性はここからは見えにくい。しかし、「友の会以前」のうち『友の会』成立の直前の数年と戦後の「隆盛前期」にどちらの量とも著しい増加を示していることは、『友の会』の成長期となんらかの関係があるのかもしれない。なぜならこれらの時期は、『友の会』の会員数が増加した時期でもあるからである。

5-2-4 個別分析

次に、分類項目ごとの記事数の増減を分析する。

(1) 「内容」の変遷

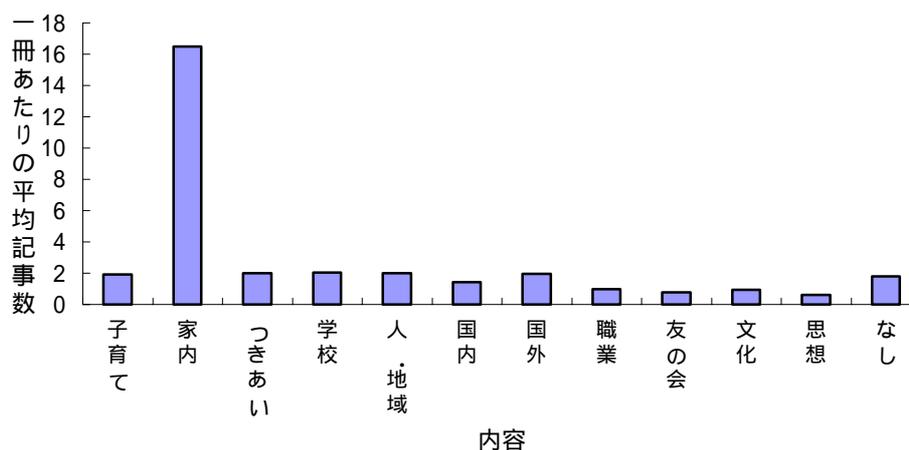


図 5-2 「内容」別 1 冊あたりの平均記事数

「内容」は、図 5-2 が示すとおり、「家内」が圧倒的に多い。他の「内容」がおおよそ毎号に 1~2 記事であるのに対し、「家内」の記事はほぼ 16 記事載るのである。1 号あたりの平均記事数が約 31 であることから、ほぼ毎号において、「家内」に関する記事が半分を占

めているということである。

では、これを時代ごとに見てみるとどうであろう。毎号の平均を の大ききで示したグラフが図 5-3 である。このグラフから次のことが読み取れる。

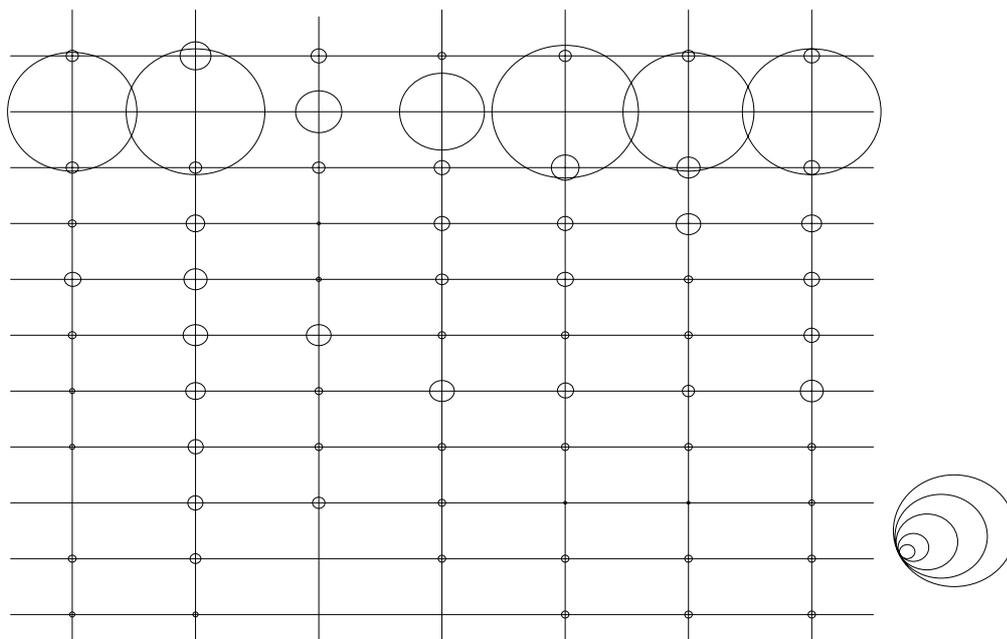


図 5-3 「内容」の各号平均数の推移グラフ

- ・「子育て」が最も多いのは「萌芽期」である。
- ・「家内」の記事は全時代多いとはいえ、「戦中」と「隆盛前期」はその割合が減少する。
- ・「つきあい」は、「隆盛後期」が最も多い。
- ・「学校」は、「友の会以前」と「戦中」はほとんどないが、^{子育て}「隆盛後期」との時代はほぼ同じくらい存在する。
- ・「人・地域」は、「萌芽期」に多く、「戦中」はほとんど存在しない。
- ・「国内」は、「萌芽期」と「戦中」に多い。「転換後期」^{家内}になってわずかに増加する。
- ・「国外」は、「友の会以前」と「戦中」以外に存在する。
- ・「職業」は、「萌芽期」に僅かに多い。
- ・「友の会」は、「萌芽期」と「戦中」に僅かに多い。
- ・「文化」は、「戦中」以外ほぼ一定量存在する。 ^{つきあい}
- ・「思想」は、「友の会以前」と「萌芽期」に載るが、しばらく途絶え、「隆盛後期」以降再び存在する。

学校

これらを時代ごとにまとめると、次のようになる。

- ・ 「友の会以前」は、「家内」が圧倒的に多い。
- ・ 「萌芽期」は、他の時代と比較して「家内」以外が僅かながらも存在していることから、最も内容豊富な時代であるといえる。
- ・ 「戦中」は、非常時とはいえやはり「家内」が多いが、その多さは他の時代ほど顕著でない。「家内」以外では、「国内」が多い。
- ・ 「隆盛前期」は、「戦中」について「家内」の多さが顕著でない。「国外」が増えたことが特徴的である。
- ・ 「隆盛後期」から「転換後期」は、各カテゴリーの存在する数が似ている。強いていえば、「隆盛後期」は「つきあい」が、「転換前期」は「つきあい」と「学校」が、「転換後期」は「国外」が、その前の時代より増えている。

(2) 「形態」の変遷

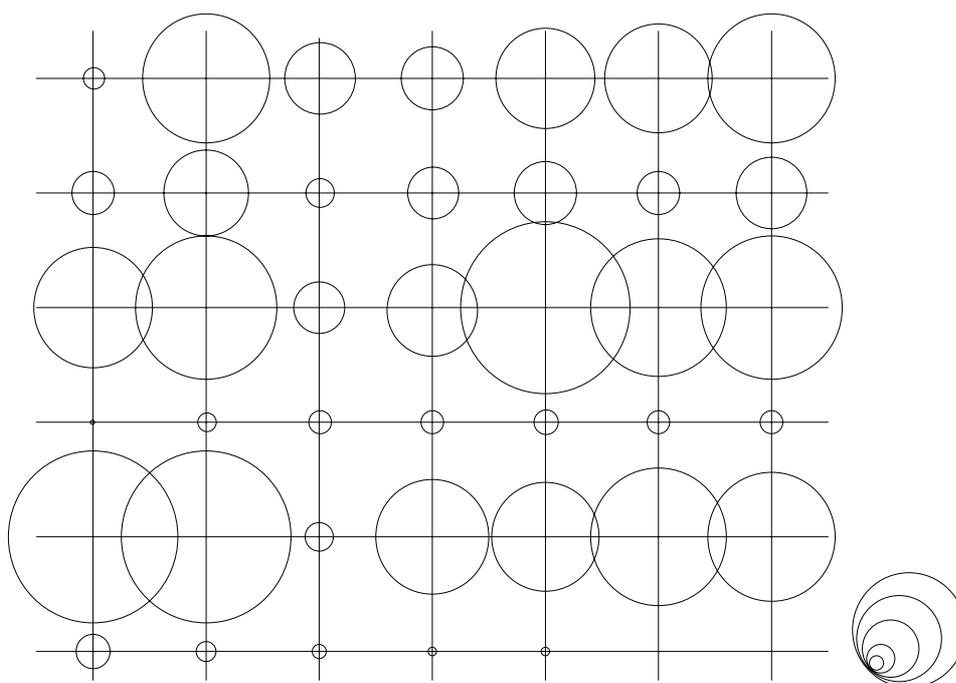


図 5-4 「形態」の各号平均数の推移グラフ

次に、記事の「形態」について分析する。

「内容」同様、各時代の該当記事総計を該当年数で割り、1年あたりの出現平均数を求めた(図5-4)。この図から次のことが読み取れる。

・ 「事実」は、「萌芽期」に最も多い。「戦中」から「隆盛前期」に数を減らす、その後次第に増えている。

- ・「知識」も、「萌芽期」に多い。やはり「戦中」に減り、その後小さな増減を示す。
- ・「疑問回答」は、「友の会以前」から多い。「萌芽期」にさらにその数を増やし、「戦中」減少、その後は「隆盛後期」が最も多い。
- ・「座談」は、「萌芽期」以降、少ないながらもほぼ一定量存在する。
- ・「エッセイ」は、「友の会以前」が最も多い。戦前に多く「戦中」減少、そして戦後の各時代はほぼ一定量存在する。
- ・「啓蒙・主張」の数は多くない。「友の会以前」が最も多く、次第に減少している。

これらを時代ごとにまとめると、次のようになる。

- ・ 「友の会以前」は、「エッセイ」と「疑問回答」の多さが目立つ。
- ・ 「萌芽期」は、前の時代に加えて「事実」と「知識」も増える。
- ・ 「戦中」に最も多いのは「事実」で、続いて「疑問回答」である。
- ・ 「隆盛後期」は、「エッセイ」と「疑問回答」が数を増やす。
- ・ 「隆盛後期」から「転換後期」は、各カテゴリーの存在数が似ている。そんな中で、「事実」が少しずつ増え、「疑問回答」が少しずつ減っている。

(3) 「執筆者」の変遷

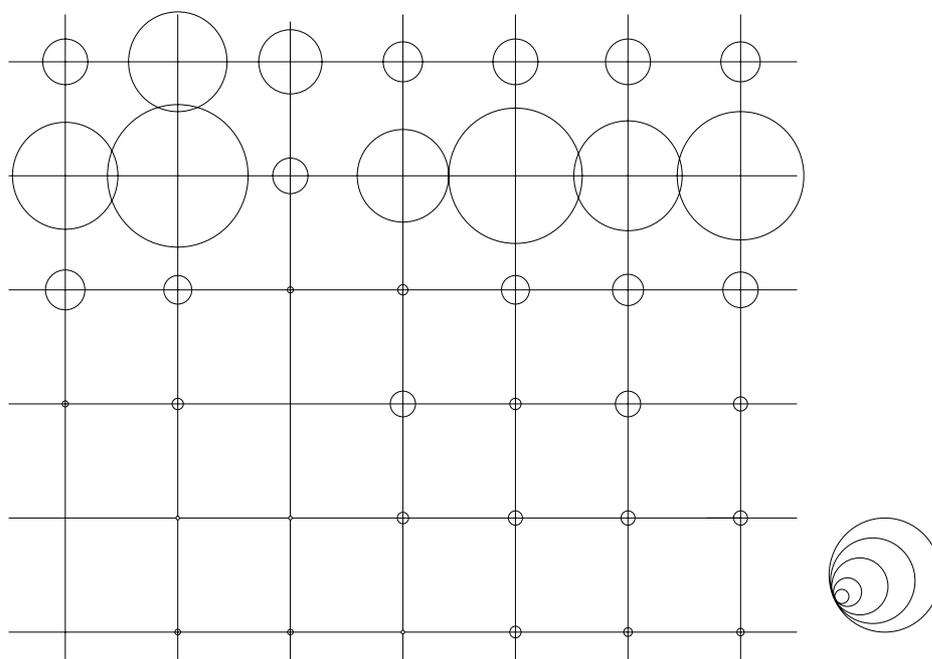


図 5-5 「執筆者」の各号平均数の推移グラフ

次に、記事の「執筆者」についても同様に分析する。

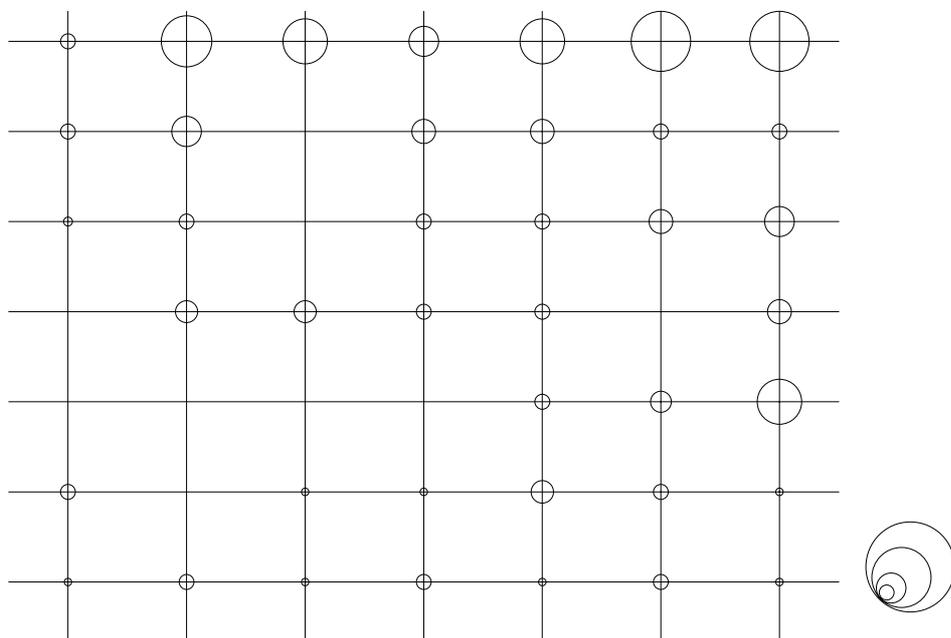
図 5-5 から読み取れるのは、以下のとおりである。

- ・「編者」による記事は、「萌芽期」、「戦中」の順に多く、他の時代は、ほぼ一定量存在する。
- ・「文化人・識者」による記事は、「萌芽期」と「隆盛前期」に多い。他の時代は、ほぼ一定量存在する。
- ・「読者」による記事は、「友の会以前」が最も多い。「戦中」と「隆盛前期」は少なくなるが、他の時代は一定量存在する。
- ・「投稿・懸賞」の記事は、「隆盛前期」と「転換前期」に多い。「戦中」は存在しない。
- ・「友の会」による記事は、「萌芽期」にわずか、戦後はほぼ一定量存在する。
- ・「その他」による記事は、「隆盛前期」に多い。「友の会以前」には存在しない。

これらを時代ごとにまとめると、次のようになる。

- ・ 「友の会以前」は、「文化人・識者」による記事が最も多い。あとは「編者」と「読者」である。
- ・ 「萌芽期」は、「編者」による記事の数が増える。
- ・ 「戦中」になると、「編者」による記事が最も多くなる。
- ・ 「隆盛前期」は、再び「文化人・識者」による記事が増える。「友の会」や「投稿・懸賞」も増える。
- ・ 「隆盛前期」から「転換後期」は、やはり各カテゴリー割合が似ている。わずかに「友の会」と「読者」による記事が増える。

(4) 「テーマ」の変遷



友の会以前

萌芽

図 5-6 「テーマ」の各号平均数の推移グラフ

最後に、記事の「テーマ」についても同様に分析する。

図 5-6 から読み取れるのは、以下のとおりである。

- ・ 「儉約・節約」は全カテゴリーの中で最も多いが、「友の会以前」には他の時代より少ない。
- ・ 「時短・便利さ」も、「友の会以前」には少ない。「戦中」も少ない。「萌芽期」と「隆盛前期」、「隆盛後期」に多い。
- ・ 「不条理」は、「戦中」を除いて、次第に増加している。
- ・ 「協力」は、「萌芽期」から「隆盛後期」、「転換前期」を飛び越えて「転換後期」に存在している。
- ・ 「環境」は、「隆盛後期」から現れて次第に増加している。
- ・ 「整理・きれい」は、「萌芽期」以外に多い。中でも「隆盛後期」が最も多い。
- ・ 「科学」は、「萌芽期」、「隆盛前期」、「転換前期」に多い。

不条理

これらを時代ごとにまとめると、次のようになる。

- ・ 「友の会以前」は、該当する「テーマ」に関して述べている記事は少ないものの、とくに「儉約・節約」、「時短・便利」、「整理・きれい」が比較的多い。
- ・ 「萌芽期」は、「儉約・節約」、「時短・便利」の順に多い。「協力」が現れる。

協力

- ・ 「戦中」も、「儉約・節約」が多く、「協力」が2番目に多い。
- ・ 「隆盛前期」は、「環境」以外、ほぼ一定量存在する。
- ・ 「隆盛後期」は、「科学」は減るが、ほかはほぼ一定量存在する。
- ・ 「転換前期」は、「協力」以外存在する。「儉約・節約」が徐々に増えてきている。
- ・ 「転換後期」は、「環境」、「不条理」、「協力」の数が増える。「整理・きれい」、「科学」が減る。

5-2-5 クロス集計による考察

次にクロス集計による分析を行なう。テーマごとの増減だけでなく、たとえば、「座談会」という特定の「形態」における「内容」が、各時代にどのように増減したか把握することで、各時代の特徴がより鮮明に浮かび上がると考えたからである。以下に、特徴的なクロス集計結果を示す。

(1) 「座談会」×「内容」・「座談会」×「執筆者」

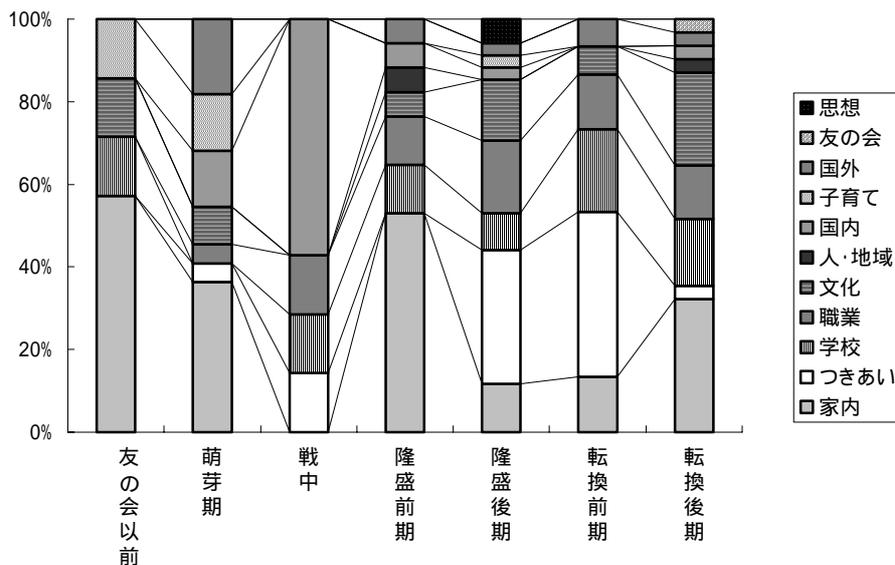


図 5-7 各時代における「座談会」×「内容」のクロス集計結果グラフ

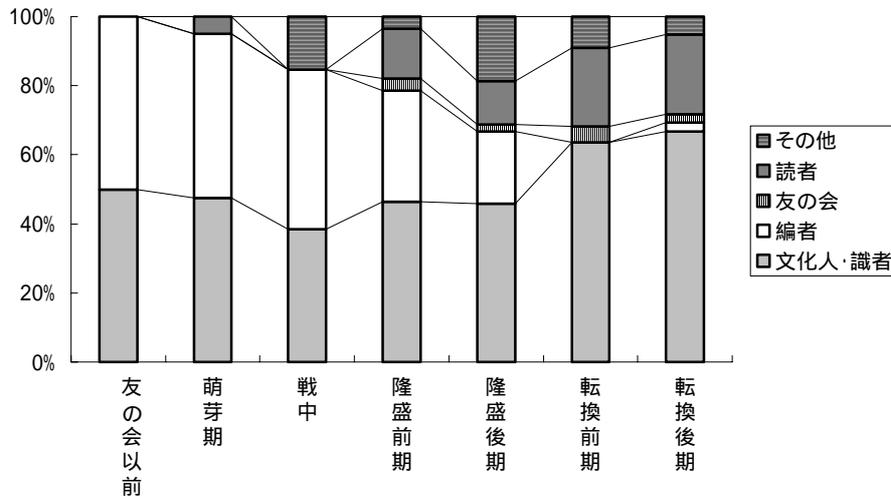


図 5-8 各時代における「座談会」×「執筆者」のクロス集計結果グラフ

「座談会」は、『婦人之友』誌における代表的な記事である。「座談会」の「内容」は、それぞれの時代における送り手の関心や、送り手が読者に伝えたいことを示していると思われる。

分析の結果、「内容」全体の増減とは全く違った増減をしていることがわかった。

全体的に「家内」は確かに多いが、「戦中」はなく、戦後も「転換前期」まで減少し続けている。

時代別にみると、戦前に多い、「よき母の苦心はここにあり」（1910年）「赤坊によい習慣をつけませう」（1934年）といった「家内」が、次第に「大東亜と人材」（1942年）「決戦下の教育対談」（1944年）といった「国内」に取って代わるのである。これら時代の「座談会」執筆者（＝参加者）をみてみると（図 5-8）「編者」と「文化人・識者」が大半を占めている。このうち「編者」は、主に羽仁夫妻であることが多い。

「隆盛前期」は再び「家内」が増えるが、「隆盛後期」、「転換前期」になると、「つきあい」が増える。これらの時代の座談会テーマは「流儀をもって暮らそう」（1968年）「冠婚葬祭を考える」（1971年）などである。執筆者（参加者）として、「文化人・識者」とともに「読者」も次第に増えていく。なおこの「読者」は、「参加者」として「主婦」と示してあることが多く「読者」に分類しているが、実際は「友の会会員」であることが多かったようだ。

「転換後期」にはいると、「家内」とともに「文化」が増える。

この分析から、以下のことがわかった。

- ・ 「戦中」において、送り手が深く関心を示したのは、「国内」である。
- ・ 比較的世の中が平穏な時代である「友の会以前」や「隆盛前期」は、「家内」に関する関心が高い。

- ・ 「隆盛後期」から「転換前期」にかけての関心が高いのは、「つきあい」であった。
- ・ 「転換後期」にあたる近年は、「文化」への関心が高まりつつある。
- ・ 「座談会」は、当初「编者」と「文化人・識者」によるものであったが、次第に「文化人・識者」と「読者」である割合が多くなってきている。

(2) 「投稿・懸賞」×「内容」

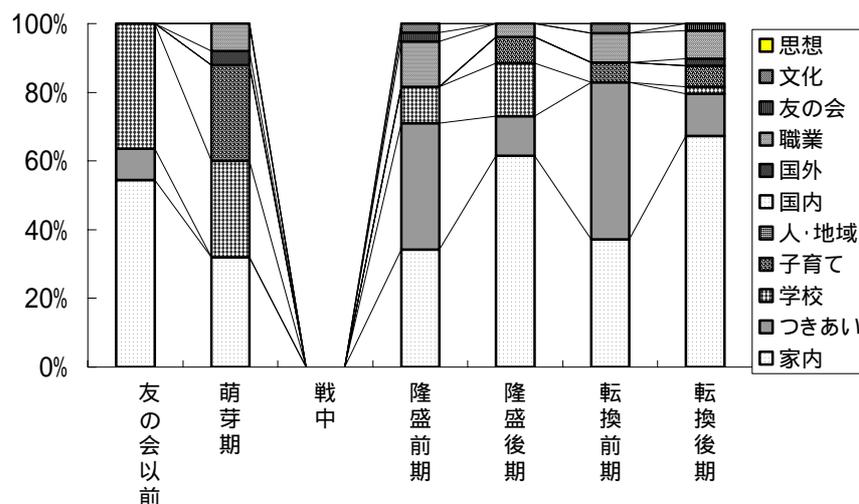


図 5-9 各時代における「投稿・懸賞」×「内容」のクロス集計結果グラフ

「投稿・懸賞」は、送り手がテーマを設定したうえで募るものではあるが、一般読者の関心や伝えたいことや訴えたいことの表象であると考えられる。分析の結果、全時代を通して「家内」が多いが、戦前はとくに「子供の遊び場をいかにすべきか」（1912年）、「子供を丈夫にした著しい経験」（1935年）など、「子育て」や「学校」といった子どもに関するものが多く、戦後はやはり、「私の住む町村で感じること」（1955年）などの、「つきあい」に関するものが多いことがわかった。

(3) 「読者」・「友の会」 × 「内容」

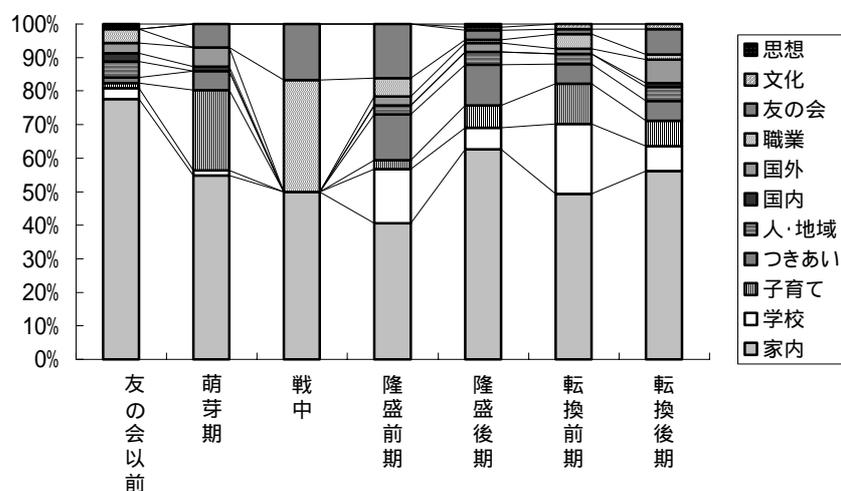


図 5-10 各時代における「読者」・「友の会」 × 「内容」のクロス集計結果グラフ

「執筆者」が「読者」に分類される項目は、実は『友の会』会員である場合が多いことが、ヒヤリングによりわかっている。そこで「読者」と「友の会」が「執筆者」である「内容」を分析してみた。この分析より、婦人之友社が『友の会』会員に、おおよそではあるが、何を書かせたかがわかると判断した。ただし「友の会以前」には『友の会』会員はいなかったため、この分析結果のうち、少なくとも「友の会以前」は信用性がない可能性がある。

結果は、「投稿・懸賞」よりも、全時代を通して「家内」が多いことがわかった。そのほか「投稿・懸賞」と比較して特徴的なのは、「戦中」の「職業」が比較的多いことと、戦後の4時代における「つきあい」が、「投稿・懸賞」ほど多くないことである。なお、「戦中」の「職業」とは、「工場の経営を任せられて」（1944年）、「増産をになう農家の主婦として」（1944年）など時局における女性の役割に関するものであった。

(4) 「不条理」 × 「執筆者」、 「環境」 × 「執筆者」

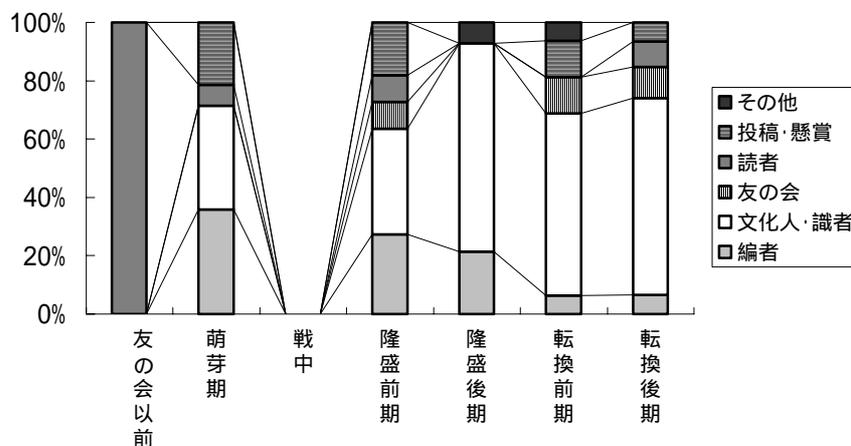


図 5-11 各時代における「不条理」 × 「執筆者」のクロス集計結果グラフ

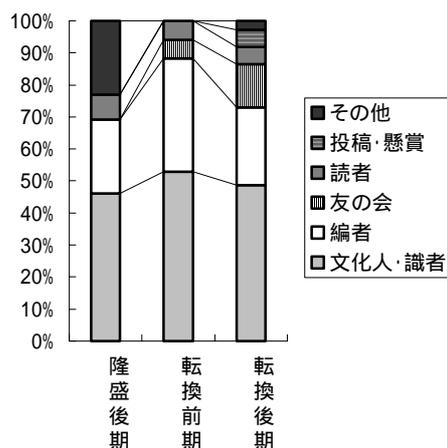


図 5-12 「隆盛後期」以降各時代における「環境」 × 「執筆者」のクロス集計結果グラフ

次に、「不条理」や「環境」が「テーマ」となった記事の執筆者割合の比率変遷をみてみる。これらのうち「環境」は、戦後活発になったものであり、該当データも「萌芽期」に1つと「隆盛前期」に1つしかなかったため、「隆盛後期」以降で分析を行なう。

「不条理」に関して「友の会以前」は読者のみであるが、これは「世の中はまだこのやうに階級的で偉い先生哀れな生徒」（1922年）など階級社会を憂いたものである。「戦中」はこれに該当する記事はないが、この「戦中」を挟んで「萌芽期」と「隆盛前期」は「文化人・識者」・「編者」・「読者」・「投稿・懸賞」がほぼ同じくらい存在する。さらに「隆盛前期」には「友の会」が加わってくる。その後、「編者」は次第に後退、「カンボジアの象徴」（1994年）、「路上で暮らす子どもに教育を - コロンビアのニコロ神父の学校」（1995年）など、「文化人・

識者」によるものが増えていく。

「環境」に関しても、やはり「文化人・識者」が多いものの、特に「転換後期」は、「人のいのち もののいのち 地球のいのち 大阪友の会」(1990年)、「生ゴミから生活を見直す 松戸友の会」(1997年)など、「友の会」執筆割合の増加が目立つ。

(5) 「知識」×「執筆者」、「疑問回答」×「執筆者」、「事実」×「執筆者」

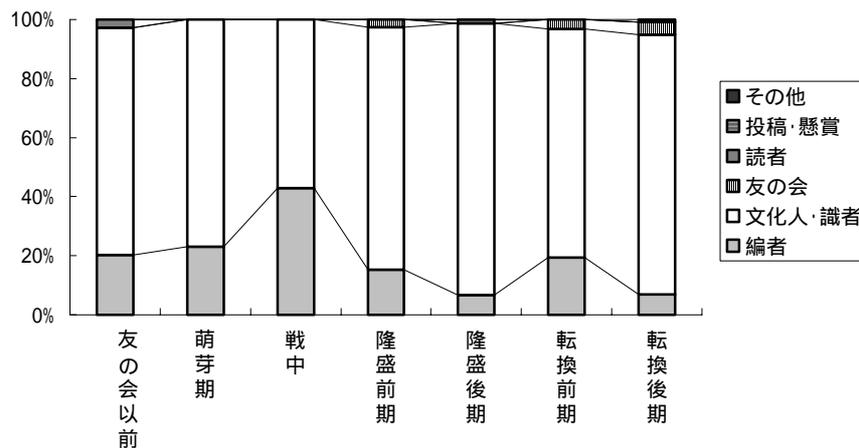


図 5-13 各時代における「知識」×「執筆者」のクロス集計結果グラフ

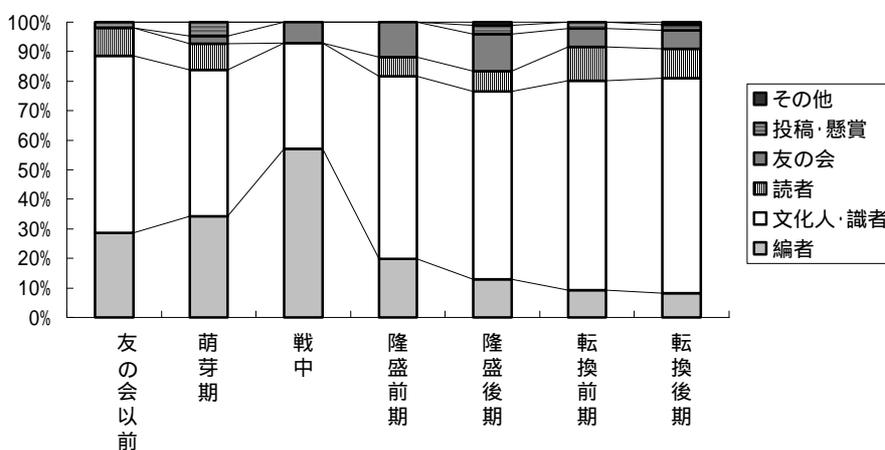


図 5-14 各時代における「疑問回答」×「執筆者」のクロス集計結果グラフ

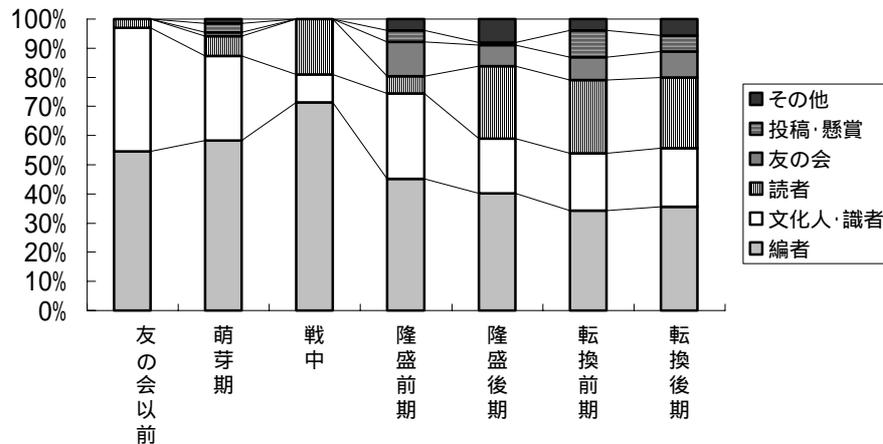


図 5-15 各時代における「事実」×「執筆者」のクロス集計結果グラフ

「知識」、「疑問回答」は知恵や情報を与えるもの、一方「事実」は得た知識を付加してレポートするものが主である。つまり、「友の会」、「読者」、「投稿・懸賞」といった受け手による「事実」は、送り手の「知識」、「疑問回答」、「事実」で得た知識や情報による学習効果と考えられる。

「知識」、「疑問回答」、「事実」の3つの「執筆者」を比較してみると、「編者」はいずれも「戦中」をピークに山型、「文化人・識者」は「知識」と「疑問回答」では次第に数を増やすが、「事実」は、「赤ちゃんの入院 完全看護に預けた父母の育児日記」(1961)「高校増設に取り組む」(1973年)「地すべりで家を失う 長野湯谷団地」(1985年)などを書いた「読者」がその数を増やすのと反比例して減少している。

ところで「友の会」は、「疑問回答」では戦中から、「事実」では「隆盛後期」から存在している。たとえば「整理下手の家の整理手ほつき」(1942年)の執筆者小林四枝は、戦前から戦後にかけて、頻繁に誌上に登場している。

5-2-6 量的分析まとめ

以上、『婦人之友』誌の総体的分析、個別分析、クロス集計分析を行ってきた。ここまでの分析で見えた各時代の特徴を、おおまかに示す。

(1)友の会以前

『婦人之友』誌が順調に発展する「友の会以前」は、主に送り手によって、「家内」をどうきりもりすればいいかの情報が与えられた時代である。社会事象に関する客観的で速報的な情報はあまりなく、送り手が、良妻賢母思想や西洋のライフスタイルを提示し、「主婦はこうあるべき」と「押し付けた」といっても過言はないであろう。一方、受け手の投稿の「内容」は、「家内」と「学校」、「つきあい」であった。

(2)萌芽期

内容・ボリューム共、誌面が最も充実していた「萌芽期」は、「家内」一辺倒だった前の時代と比較すると、「世界の新情勢にたつ」（1939年）、「最近のイタリアおよびドイツ」（1940年）など、「国内」や「国外」など社会的記事が増えたことが特徴的である。特に送り手は、国内外の情勢に目をむけ、時局の緊迫に伴って儉約を勧める。

一方受け手が執筆することは少なかったが、それでも登場するときは、「家内」、「子育て」、「学校」といった「内容」であり、家と子ども行動枠の範囲内であった。『友の会』も成立し、会員も頻繁に登場するが、会員による執筆記事は「家庭で手まめに染物をませう」（1938年）、「心もからだも健全な赤坊つくりのために」、「蚊取り線香の空き箱でさいほうばこ」（1940年）など、まだ、家内や子育ての領域を出ていないのである。

(3)戦中

送り手は、国内の情勢を語り儉約や協力体制を勧める。そして、「婦人の活躍」（1944年）、「増産を担う農家の主婦として」（1944年）などで、国家のために働く女性は、誌上で讃えられるのである。

こうした女性の戦争協力への誘導は、『婦人之友』誌に限らない。先述の『婦人雑誌からみた一九三〇年代』でも、『婦人公論』、『主婦の友』、『婦人倶楽部』が、1930年代後半から「著名人を使った巧みな論理のすりかえ」⁵⁾を行なったことを指摘している。『婦人之友』誌においては、送り手の中でも羽仁もと子自らがこれを先導していた。

(4)隆盛前期

再び誌面が順調に拡大する「隆盛前期」になると、執筆者の変化が目立つ。「编者」が後退して、再び「文化人・識者」と、新たに「友の会」や「投稿・懸賞」が増える。家の中のことは相変わらず語られるが、特に受け手は、つきあいのこと、子どもの学校での教育に関心が高くなる。受け手のうち『友の会』は、レポート記事執筆や疑問回答者として活躍し始める。とくにこの時代の「不条理」の記事に注目してみると、「農村にいい交わりをつくるために」（1948年）、「働く農家にいい食事を」（1954年）など、そのほとんどが、日本の農村に視線を向けたものなのである。

(5)隆盛後期

戦後もっとも誌面が充実する「隆盛後期」は、羽仁もと子の死亡で「编者」はますます後退する。『友の会』会員の誌上台頭は徐々に増える。話題の中心は、つきあいに関することが減り、家の中のことが再び増える。その内容は「木の実のブローチ 飯田友の会」（1964年）、「流しの下にもうひとつ流しを」（1966年）、「家庭でできる染め替え」（1970年）など、必ずしも入用なものではなく、あればより便利・より楽しいといった知恵であった。

(6) 転換前期

ページ数の減少で始まった「転換前期」は、『友の会』会員や投稿等、受け手の誌上登場がますます活発になる。送り手・受け手両方が関心を示すのはつきあいや学校に関することであった。環境問題に取り組み始めたとはいえ、受け手による記事は少なく、送り手からの情報伝達が主であった。

また、この時代のもうひとつの特徴は、「協力」という「テーマ」の記事がほぼ皆無になることである。これは、全時代の中で最も少ない。

つまり、「隆盛前期」と「転換前期」は、『友の会』は組織としての力を徐々に誌面に見せてはるものの、かつてのような救済すべき対象もなく、また羽仁もと子という先導者もないため、誌面を揺るがすに至らないのである。

(7) 転換後期

『友の会』において「バングラディッシュとの台所交流」が始まったことは、誌上にも反映している。「大豆料理の試食会を開きました」（1984年）、「大豆料理バングラディッシュ向き工夫18種」（1985年）、「東京のバングラディッシュへようこそ」（1989年）などである。この時代に著しく増えた環境に関する記事は、『友の会』の執筆の割合が前の時代より増えた。

誌上の『友の会』の対外的活動が目立つようになった一方で、「文化人・識者」の割合が多くなった。送り手側は、それを補強するような、「食生活とダイオキシン」（1998年）、「外食産業による輸入牛肉事情」（2001年）など、知識や現状ルポを載せる。

この時代は「文化」への視線が増える。「座談会」でも「文化人・識者」が台頭、その話題は「文化」、そして再び「家内」が増加するのである。

つまり、かつての「東北セツルメント」⁶⁾や「農閑期衣食住生活学校」⁷⁾のように、『友の会』が再び対外活動に立ち上がった様相が読み取れるが、前の時代と異なるのは、羽仁もと子の先導なしに自分たちで歩み出したことである。

5-3 『婦人之友』誌の質的分析

5-3-1 数量化 類による分析

前節では、筆者が主観的に設定した項目が、時代変遷とともにどのように増減するかに注目し考察を加えた。本節では、客観性のあるデータを導きだすため、「数量化 類」を用いる。

「数量化 類」とは、「各サンプルがあるカテゴリーに反応したとき“1”を、そうでないときには“0”というダミー変数を導入する。そこで、反応の似ているパターンは互いに近い数値を与え、同時にカテゴリーにも似ている反応のとき互いに近い数値を与えようとする」⁸⁾分析方法である。これによって、各号が他の号と比較してどの位置にあるかがわかり、各号を特徴づけることが可能になる。

各号の特徴を把握するため、分析結果を散布図化する。各号がそのグラフ上のどの位置に配置されるかに注目し、時代の変遷による特徴を把握する。

なお、数量化 類には「エクセル統計 2000 for Windows」を用いた。

5-3-2 分析カテゴリーの設定

数量化 類分析も、量的分析と同じ 1903 (明治 36) 年から 2005 (平成 17) 年までの毎 10 月号を対象に行なった。誌面編集のカテゴリーは、以下の 3 点から設定した。

表 5-4 カテゴリー設置基準

No.	カテゴリー設置意図	説明
1～12	内容的特徴把握	他の婦人雑誌にはみあたらない『婦人之友』誌の特徴的なテーマによる
13	誌面の充実度把握	ページ数の多さ
14	創立者の存在度把握	羽仁もと子の記事の扱い ⁹⁾ (グラビアに続いてトップに載っているか?)

決定したカテゴリーは以下のとおりである（表 5-5）。

表 5-5 数量化 類カテゴリー一覧

No	カテゴリー	説明	例	基準
1	夫婦	夫婦関係に関する記事	夫婦生活の真実なる話（1913年） 結婚16年をかえりみて（1929年） 夫婦と社会（1960年）	分析対象号に該当記事があれば「1」、なければ「0」
2	洋風提案	西洋風の生活提案の記事	アットホームの話英国家庭の見聞（1907年） 手軽にできるパンいろいろ（1917年） 手拭い地で子供の洋服（1919年）	
3	キリスト教	キリスト教や聖書に関する記事	この世と神の愛（1966年） 孤独と愛と（1975年） なんじの神を選べ（1970年）	
4	悲嘆	自分あるいは他者の不幸を嘆く記事	何うしたら明るい生涯に（1919年） 何のために生きるのか 三人の子を焔に奪われた母をたずねて（1962年）	
5	第三国	第三国の現状を伝える記事	タゴールの理想に生きる（1966年） ベトナム難民の背景（1978年） ネパールでの救済活動（1974年）	
6	環境	自然や環境配慮に関する記事	これからのゴミ処理と社会システム（1997年） 白神山地の自然を次代へ（2004年）	
7	戦争・平和	戦争を反省し平和を求めることに関する記事	ベルリンの危機と平和への願い（1961年） ベトナムに平和を求め（1965年） 平和への次の一步は？（1983年）	
8	農村改良	農村改良活動・現状ルポ	豊北セツツルメント希望の秋（1935年） 農村により交わりを作るために（1948年） 農村に夢を！（1962年）	
9	仕事と女性	女性の就業に関する記事	肉屋のおかみさんと語る（1937年） 女の生き方選択（2004年） 女のライフワークと家庭 歌と私（1997年）	
10	合理的	儉約・節約、時短・便利さを特に主題とした記事	最も無駄のない能率的な照明を（1939年） 簡易住宅に合理的に住む（1945年） 食事生活も科学的な山本あや夫人（1955年）	
11	科学	科学技術の知識と家庭生活への応用提案記事	防火塗料レプトライト（1924年） 防寒の科学（1948年） 照明 - 光と影の効果を生かす（1974年）	
12	自由学園	自由学園、自由学園の活動に関する記事	自由学園の新分野について（1934年） 蚕を育てて 自由学園初等部4年生の理科から（1978年） 野菜のビタミンCは、調理・保存法でこんなにかわる（1986年）	
13	多ページ	『婦人之友』総ページを<1~99>、<100~169>、<170以上>に分けたうちの<170以上>に該当すれば「1」、そうでなければ「0」		
14	羽仁トップ	羽仁もと子執筆の記事がグラビアに次いでトップにあれば「1」、なければ「0」		

5-3-3 分析結果

数量化 類をおこなった結果は、表 5-6 のとおりである。

表 5-6 数量化 類結果の固有値と寄与率

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第 1 軸	0.5485	21.23%	21.23%	0.7406
第 2 軸	0.3824	14.80%	36.02%	0.6184
第 3 軸	0.2755	10.66%	46.68%	0.5249

表 5-7 各因子軸のカテゴリウエイトと軸の解釈

カテゴリー	第 1 軸		カテゴリー	第 2 軸		カテゴリー	第 3 軸	
環境	-1.3988	↑ public ↓ private	洋風提案	-1.7116	↑ cultural ↓ practical	自由学園	-2.1300	↑ original ↓ common
第三国	-1.0609		夫婦問題	-1.2754		洋風提案	-2.0767	
キリスト教	-1.0039		環境	-1.1561		仕事と女性	-1.6155	
戦争・平和	-0.8408		キリスト教	-0.7238		環境	-0.6080	
多ページ	-0.3855		第三国	-0.7111		農村改良	-0.4371	
仕事と女性	-0.3333		戦争・平和	-0.5460		第三国	-0.0917	
自由学園	-0.2522		多ページ	-0.3466		羽仁トップ	-0.0600	
農村改良	0.0275		悲嘆	-0.1476		キリスト教	0.0604	
科学	0.3211		仕事と女性	0.1359		多ページ	0.1112	
羽仁トップ	0.3659		科学	0.6839		夫婦問題	0.4637	
合理的	0.4741		羽仁トップ	0.6980		合理的	0.6188	
悲嘆	1.5717		自由学園	1.4008		科学	1.2193	
夫婦問題	2.1156		合理的	1.7214		戦争・平和	1.4463	
洋風提案	2.4896		農村改良	2.2928		悲嘆	2.0481	

第 1 軸の負方向にある「環境」や「第三国」、「戦争・平和」は自分より他者や社会を配慮した項目であり、「キリスト教」は一般的に世界平和を願う宗教である。正方向の「洋風提案」や「夫婦問題」、「悲嘆」などは、自分のことや家の中をよくするための工夫や悩みがある。よって第 1 軸は、視野の広がりを示す『public-private』軸とした。

第 2 軸の負方向の「洋風提案」、「環境」は、いずれも送り手側が導入すべき新しい知識として提供している情報である。「夫婦問題」は、受け手の悩みに対する送り手のアドバイス、つまり「こうすればいい」といった知恵の伝達であり、「キリスト教」、「第三国」、「戦争・平和」は、受け手を新たな視点へ導くものである。いずれも生活するうえでの知恵や知識であることから、「教養的 (cultural)」と解釈できる。正方向の「農村改良」と「自

由学園」は送り手の提案の実践現場であり、「合理的」は送り手の提案の実践における第一命題である。「羽仁トップ」が示すのは、羽仁思想の強力なインプットによる実践への後押しと解釈できる。そこで正方向を「現場的 (practical)」と解釈し、第2軸を『cultural-practical』軸であるとした。

第3軸の「自由学園」、「洋風提案」、「仕事と女性」、「環境」、「農村改良」は、いずれも『婦人之友』誌が読者に送り込んだこの雑誌特有の知識や情報であることから、「斬新的 (original)」と解釈した。逆に、正方向の「悲嘆」、「戦争・平和」、「科学」は、『婦人之友』誌に限定されたものでなく、既に広く知られているあるいは行なわれている事象である。そこで正方向を「普遍的 (common)」と解釈し、第3軸を『original-common』軸とした。

5-3-4 質的分析結果

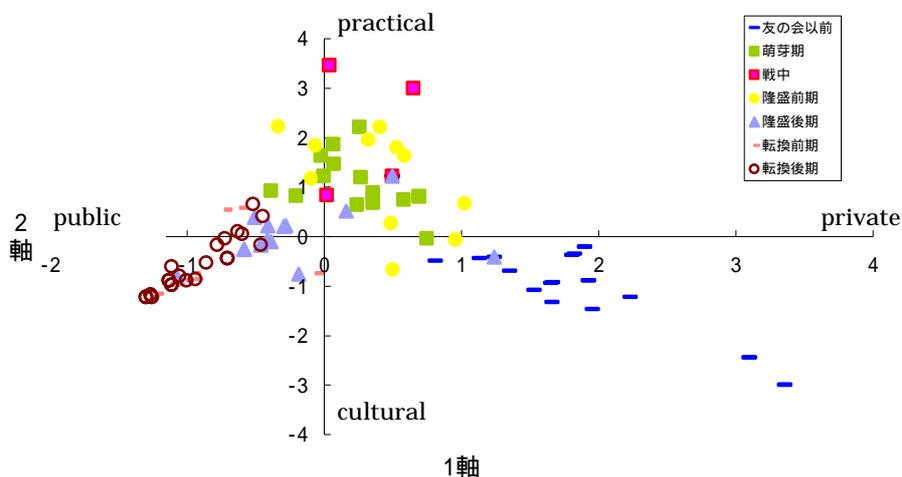


図 5-16 各号特徴化のための散布図 (1軸×2軸)

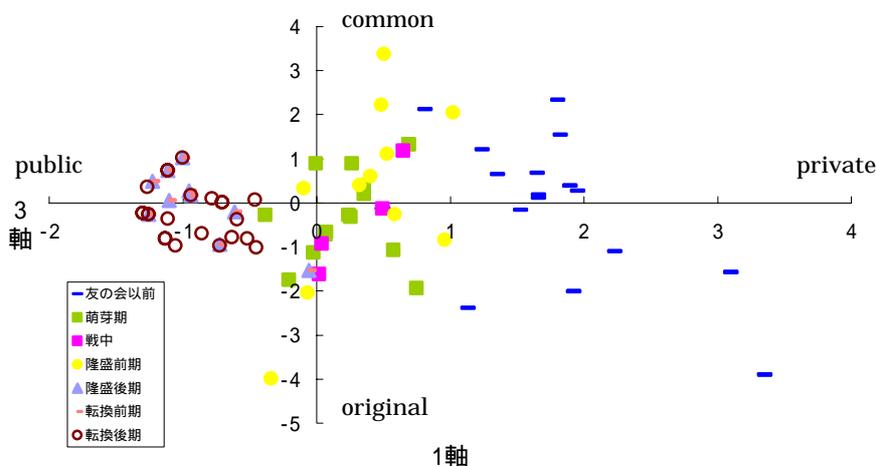


図 5-17 各号特徴化のための散布図 (1×3軸)

(1)1軸×2軸

散布位置が時代の変遷とともに右から左へ、ひらがなの「へ」の字型に推移している。

「友の会以前」発行号のほとんどが、「教養的」で「私的」な傾向を示す。「萌芽期」から「戦中」を経て「隆盛前期」までは、「私的」-「公共的」な偏りはなくなるが、「戦中」をピークに極端に「現場的」な内容になっている。「隆盛後期」から「転換後期」にかけては、「公共的」な内容が次第に多くなるとともに、再び「教養的」方向に傾いていくが、その変化は前の時代ほど極端でない。すなわち、全時代を通して「私的」から「公共的」に変化するが、近年になるにしたがって、これらの特徴が似てきているといえる。

(2)1軸×3軸

全体的に「私的」から「公共的」傾向へと推移している。また、当初拡散的であるが、次第に収縮している。「普遍的」-「斬新的」という軸でみた場合、「友の会以前」は極端な「普遍的」傾向を示すこともあり多様であるが、「萌芽期」から「戦中」になるとその具合は小さくなり、「隆盛前期」に再び多様化傾向が顕著になる。しかし「隆盛後期」以降は中庸に集中してしまい、動きがない。

5-3-5 質的分析まとめ

散布図化したことで以下のことが明らかとなった。

- ・誌面は時代を追うごとに「私的」傾向から「公共的」傾向を示すようになってきているが、次第にその変化は鈍くなり、「転換前期」以降停滞ぎみである。
- ・「教養的」-「現場的」軸で見ると、当初「教養的」だが次第に「現場的」になり、そのピークは「戦中」で、その後再び「教養的」傾向を示しつつある。
- ・「普遍的」-「斬新的」軸で見ると、「隆盛前期」が最も多様な傾向を示す。この時代をピークとして、その後の時代は中庸的である。

5-4 まとめ

本章では、『友の会』の活動の節目に合わせて時代区分を設定し、その特徴を『婦人之友』誌の量的・質的分析から明らかにしてきた。

以下、時代を追ってみていく。

(1)「友の会以前」

散布図が、極端に「私的」で「教養的」である。つまり、話題が「家内」や「学校」、「つきあい」といった、家とその周辺のことにはしかなく、送り手がそれらをどう行えばいいかを教える記事がほとんどであった。

散布図上で、各号があまり似た傾向を示していないのは、創刊直後であり、送り手にとっては、まだ模索の期間であったからであろう。実際に、当初は投稿が皆無であったが、ほどなく多くの投稿記事が連なる時期もある。また、関東大震災直後の1923(大正12)年

10月号は、記事のおよそ85%が震災関連の手記で占められるなど、極端な記事構成にいたることがあった。

(2)「萌芽期」

「萌芽期」になり、誌面は社会に目を向けた内容に変わったことで、散布図が、より「現場的」かつ「公共的」傾向を示した。これは第2次世界大戦直前という時代で、時局に関する記事が増えたことが影響しているのであろう。しかし受け手による記事は、相変わらず家の中のことや子どもすることに終始するのである。

(3)「戦中」

戦局が悪化すると、誌面は縮小、そんな中伝えられるのは時局を乗り切るための儉約方法や国内情勢であり、羽仁もと子は読者を戦争協力へと導くのである。散布図は最も極端な「現場的」傾向を示した。

(4)隆盛前期

散布図が、極端に「斬新的」なものから「普遍的」特徴を持った号があることを示している。戦後の誌面は、羽仁もと子の持ち込む斬新な情報や思想がある一方で、悩みや科学的読み物など多岐に渡ったからであろう。投稿記事も増え、執筆者として受け手が加わることも多くなるが、「公共的」-「私的」軸においては、戦前とあまり変化がみられない。この時代は、社会への視点に広がりがなかったということであろう。

(5)隆盛後期

散布図が、少し「公共的」傾向に変わったのは、『友の会』の活動が誌上に多く載るようになり、「公共的」な活動や訴えを、誌上に示したということであろうか。また、「教養的」傾向に変わったのは、文化人が社会の不条理を訴えたことと、受け手のうちでも、とくに『友の会』からの、余暇的な知識に関する記事が増えたからであろう。

(6)「転換前期」

前の時代の延長で、散布図は少し「公共的」傾向に変化した。これは、送り手とともに『友の会』も、環境や不条理に関する記事を書くことが多くなったためであろう。しかし、「現場的」-「教養的」・「普遍的」-「斬新的」軸において、前の時代とあまり変化がなかったのは、『友の会』の活動に関する記事がほとんどなかったことや、学校やつきあいに関する記事が再び増えたためであろう。

(7)「転換後期」

前の時代と比較すると、散布図ではほとんど変化がみられなかった。しかし量的分析の

結果のうち、「文化人・識者」が増え、その内容が「家内」や「文化」という内指向に逆戻りしていることは、注目すべき変化であろう。

以上をまとめると、次のことがいえる。各時代は、2つの戦争や高度経済成長期、低成長期などの近代日本の歴史の影響とともに、

- ・羽仁もと子が新しい事業を提案した時代に、散布図が「現場的」に動く。つまり、羽仁もと子の先導力が「現場的」-「教養的」軸に影響したと考えられる。
- ・戦争の直前と、『友の会』が社会的活動を誌上で大きく載せたとき、「公共的」に動く。これは、戦争勃発直前は戦争に関する話題が記事になることが多かったし、『友の会』における、環境や不条理に関する活動は記事になりやすいからであろう。
- ・「普遍的」-「斬新的」軸は、羽仁もと子の生存中に極端な特徴を見せた。つまり、送り手・受け手全ての中で、羽仁もと子は、誌面編集に大きな影響力を持つと考えられる。

以上、『婦人之友』誌の量的・質的分析から、その変遷を把握してきた。

次章では、送り手と受け手の関係性の変遷に着目し、さらに詳細に眺めていく。

【註釈・引用】

- 1) 創刊当初は毎月発行ではなかったため、10月発行号が必ずしも10号というわけではない。
- 2) たとえば「松江友の会」の押田は、1971年10月号の「椿の墓」は投稿、1973年3月号の「椿の庭」は依頼されて書いたというのが、署名表記はどちらも「押田芳枝」であり、一般投稿か友の会会員への依頼記事かの判断ができない。
- 3) 分析対象号の現物取得および参照状況の詳細については Appendix に示す。
- 4) 斎藤道子：羽仁もと子 - 生涯と思想，p175，ドメス出版（1988）
- 5) 私たちの歴史を綴る会：婦人雑誌からみた一九三〇年代，p265，同時代社（1987）
- 6) 『友の会』による、1934（昭和9）年から翌年にかけて冷害の被害を受けた東北地方に救済活動。P.58 に詳細を載せている。
- 7) 自由学園高等部女子学生と『友の会』会員による、農村での衣食住講習。P.63 に詳細を載せている。
- 8) 日本建築学会編：建築・都市計画のための調査・分析方法，pp135-141，井上書院（1987）
- 9) 巻頭グラビア以降トップ3記事の配置状況については Appendix に示す。